

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23530648

研究課題名(和文)人間と動物の関係についての一考察 ペットブームとグルメブームの矛盾を手がかりに

研究課題名(英文) A Study of the Relationship between Humans and Animals: from the Viewpoint of the Contradiction between Pet Boom and Gourmet Boom

研究代表者

河島 基弘 (Kawashima, Motohiro)

群馬大学・社会情報学部・准教授

研究者番号：80454750

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：特に日本における人間と動物の関係の現状を(1)宗教の影響や民俗史などの歴史的視点、(2)社会の個人化傾向やペットブームなどの現代社会論的視点、(3)諸外国との比較という比較文化論的視点の3つの観点から考察した。具体的な成果としては、捕鯨問題に特化した形で単著を1冊、和文と英文の共著をそれぞれ1冊ずつ刊行。また、肉食の倫理、動物実験の是非、ペット飼育をめぐる問題などを理論と実践の両面で詳述した動物倫理の入門書を翻訳出版した。

研究成果の概要(英文)：This research explored the relationship between humans and animals from (1) the historical viewpoint (e.g. the influence of religion and folklore), (2) the viewpoint of contemporary sociology (e.g. individualism and pet boom), and (3) the viewpoint of comparative culture (e.g. the comparison between Japan and the other, especially the Western cultures). The research led to the publications of a monograph on whales and whaling, two articles on the anti-whaling movement (in Japanese and English), and a translated book on animal ethics.

研究分野：社会学

キーワード：人間と動物の関係 動物権 動物の福祉 食文化 ペットブーム グルメブーム 鯨 捕鯨

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は1997年から2005年までイギリスに在住した。イギリスで暮らして驚いたことの1つは、ベジタリアン(菜食主義者)の数の多さである。学生と教職員を合わせた大学関係者に絞れば、研究代表者の印象では、ほぼ5人に1人がベジタリアンであった。健康上の理由で肉食を避ける人もいたが、彼らの多くはスーパーなどで売っている「精肉」(meat)を「死体」(dead body)と呼び、「私は動物を食べない」と主張する良心的ベジタリアンを自負していた。動物に人間と同じ権利を与えたり、少なくとも動物の福祉を考慮しようとする動物権の思想がイギリス社会で根付いている1つの表れであろう。

(2) 日本は現在、外国産の珍しい動物が高値で取り引きされ、飼い犬や飼い猫に服を着せて可愛がったり、ペットのお墓を建てたりするなどのペットブームが続いている。しかしその一方で、テレビでは美味しい肉料理の作り方などを特集した料理番組やグルメ旅行、大食い競争などが目白押しである。ペットブームもグルメブームも人間の自己満足の追求と言ってしまうえばそれまでだが、ペットを可愛がる一方で、動物の肉に舌鼓を打つという現代人の動物への愛情の使い分けは精神分裂症的であるとも言える。

(3) エコロジーや環境保全の観点からも、畜産製品の消費を減らすなどの動物保護や、その延長線上にあるベジタリアン運動は有効である。よく言われるように、1キログラムの豚肉を生産するのに6キログラムの穀物が餌として必要であり、牛肉の場合はそれが16キログラムに跳ね上がる。肉食の習慣を止めれば、こうした穀物を人間の食料に回したり、農地を森林に戻すことも可能である。アメリカの場合は農地の約90%、国土の約50%が飼料用穀物の生産に使用されていると推計されており、

環境に与える悪影響は計り知れない。肉食を控えれば、電気の節約やリサイクルなどの省エネ活動よりも、ずっと地球環境に貢献することは明白である。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、上記で述べたような、人間の動物(特にペット)に対する精神分裂症的な態度、愛情の使い分けの原因を考察することである。ペットなどの家庭動物以外に目を向けた場合でも、たとえば日本人の鯨に対する態度はいわゆる欧米諸国とは大きく異なっており、人間と野生動物の関係にも特殊な面があるのかもしれない。

(2) 日本論や仏教を始めとする宗教研究者の中には、西欧との対比で「自然を征服するものと捉える二元論的思考の西欧人と違って、日本人は古代より自然と調和してきた」と主張する論者もいるが、現代日本人の動物に対する態度が欧米人のそれよりも「進んでいる」とは考えられない。本研究は、こうした現代日本人と動物の関係を、宗教の影響や民俗史などの歴史的視点、社会の個人化傾向やペットブームなどの現代社会論的視点、諸外国との比較という比較文化論的視点の3つの観点から考察することが目的だった。特にペットブームとグルメブームの矛盾に焦点を当てることによって、人間と動物の関係の一断面を炙り出すことを狙いとした。

3. 研究の方法

(1) 本研究の課題は「人間と動物の関係についての一考察 ペットブームとグルメブームの矛盾を手がかりに」である。この課題を、関連文献や資料の読み込みを中心とした

歴史的、理論的手法と、内外の有識者や関係者に対するインタビューやフィールドワークなどの調査的手法の2本柱で研究した。

(2) 研究初年度となる平成23年度は、本研究課題に関わる諸問題の検討と具体的な研究戦略の立案を行ない、平成24年度以降は人間と動物の関係を扱った国内外の文献や資料を読み込んだ。また、本研究と重なる時期に獲得した別の研究費(基盤研究A)などを活用する形で、ヨーロッパにありながら捕鯨を行なうなど独特の動物観を育ててきたアイスランド、デンマーク領フェロー諸島を調査地を選び、関係者へのインタビューや資料収集を実施した。

4. 研究成果

(1) 日本は、サル学を中心とした動物行動学や、iPS細胞の研究などの分子生物学の研究では世界トップクラスである。また、ペットの飼い方、その素晴らしさ・可愛さを扱った文献は、いわゆるハウツー物を中心に数多く出版されている。しかし、人間と動物の関係を現代社会論的、比較文化論的側面から採り上げた文献は少ない。これは、二酸化炭素の削減やリサイクル推進などプラグマチックな環境倫理を扱った文献の数が多いのと好対照である。動物の倫理的な扱いについて、欧米では哲学や環境倫理を専門とする研究者が数多くの良質な研究を行なっているが、この面での日本の研究は不十分であると言わざるを得ない。また、人間と動物の関係を歴史学、人類学、比較文化論などを総動員してトータルな形で考察した研究は、国立歴史民俗博物館の『動物と人間の文化誌』(1997) 岩波書店から2008年に刊行された『ヒトの動物の関係学』シリーズの4冊などがあるが、全体としては数が少ない。

(2) この点、研究代表者は微力ながら、社会学と人類学の両分野に通じており、ペットブームや社会の個人化などの社会学の観点と、食文化論などの人類学の観点の両面で考察を深めることができた。研究の目的に則して述べると、宗教の影響や民俗史などの歴史的視点では、中村生雄著『日本人の宗教と動物観』、中村禎里著『日本人の動物観』など、社会の個人化傾向やペットブームなどの現代社会論的視点では、アンソニー・ギデンズ著『親密性の変容』、ジグムント・バウマン著『液状不安』、山田昌弘著『家族ペット』など、諸外国との比較という比較文化論的視点では、保坂幸博著『日本の自然崇拜、西洋にアニミズム』、キャロル・アダムズ著『肉食という性の政治学』などを読み込んだ。また、鯨・捕鯨関係では、Tom Nauerby 著『No Nation is an Island』、Sean Kerins 著『A Thousand Years of Whaling』、Joan Pauli Joensen 著『Pilot Whaling in the Faroe Islands』などを読んだ。

(3) 具体的な発表物としては、鯨・捕鯨問題をテーマに絞った形ではあるが、いわゆる欧米諸国と日本で鯨・捕鯨観が大きく異なる理由や鯨観の歴史的変遷過程を考察した単著『神聖なる海獣 なぜ鯨が西洋で特別扱いされるのか』を出版した。また、欧米の動物保護・反捕鯨団体の活動について日本語で共著を1冊、英語論文を1冊執筆した。この問題で一石を投じることができたと自負している。

(4) 人間と動物の関係全般を扱った成果としては、米国の哲学者・倫理学者・動物保護活動家であるLori Gruen 著『Ethics and Animals』を単独翻訳し、『動物倫理入門』として出版した。同書は人間と動物の関係を哲学的・理論的面から論じた上で、牛や豚などの畜産動物、マウスなどの実験動物、動物園や水族館における展示動物、ペットなどの家

庭動物、野生動物それぞれが置かれた現状を概観したものである。先ほど述べた通り、日本ではこの種の文献は非常に数が限られており、アカデミズムの観点で一定の貢献ができたと思う。

(5)ただし、同書はあくまで翻訳書であり、研究代表者のオリジナルな著作ではない。時間の制約と調査不足のため、鯨・捕鯨関連以外では著書を刊行できなかった。近い将来、本研究で得た知見とデータとインタビューを活かし、それに共同研究者として現在取り組んでいる別の研究プロジェクトの成果を加えて、人間と動物の関係を主に倫理的視点で論じた著作を執筆したいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

KAWASHIMA, Motohiro, 'Law-Enforcing Vigilantes in the Media Era?: An Investigation of Sea Shepherd's Anti-Whaling Campaign' in *Anthropological Studies of Whaling*, Senri Ethnological Studies, 査読有、Number84、2013、pp.305-324

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 3 件)

河島 基弘、ナカニシヤ出版、神聖なる海獣 なぜ鯨が西洋で特別扱いされるのか、2011、p.288

河島 基弘 他、成山堂書店、捕鯨の文化人類学(共著) 2012、pp.302-316

河島 基弘(翻訳)、ローリー・グルーエン(著者) 大月書店、動物倫理入門、2015、p.252

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河島 基弘 (Kawashima Motohiro)
群馬大学・社会情報学部・准教授
研究者番号：80454750

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：